
雨の旋律

玄雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の旋律

【Nコード】

N9623C

【作者名】

玄雪

【あらすじ】

「時は流れるものだ。」「名無しが言った。母さんが死んだ日、僕は長年住んだ家を出た。雨は僕の人生と共にあり、僕の身体に遮るもの無く降り注ぐ。」

序章

名無しは僕に言った。

「時は流れるものだ。誰にでも始まりがあり、終わりがある。命ある者には何時か終わりが来る。それは遅いか早いかの問題、ただそれだけなんだよ。だから悲しむことはないんだよ。」

そう言われても今は悲しみたかった。だって母さんが死んだんだから……。母さんは父さんと別れた後、僕を一生懸命育ててくれた。母さんは休む間もないくらい働いた。そしていつも夜遅くに帰ってきた。時には帰ってこない日もあった。だけど朝には必ず僕に「おはよう」って言うてくれた。父さんと別れたとき、僕はあまりにも小さすぎて、いったい何が起きたのか全くわからなかった。ただ母さんが泣いていたから、僕は母さんを慰めた。

「母さん、僕、早く大きくなるよ。早く大人になって、母さんを助けてあげる。それで、絶対どこにも行かない。ずっと一緒にいる。だから泣かないで。」

母さんはそのとき、「ありがとう」と言った。その母さんが今、ここにいる。棺の中で眠っている。僕は名無しに訊いた。

「どうして生き物は死ぬの？」

名無しは僕の質問に答。『兄た。

「死ぬのが自然の決まりなんだよ。人も、大も、猫も、鳥も、魚も、虫も、植物も、みんな生まれてそして死んでいくんだ。そうしなきゃ地球はたくさんの生物で埋め尽くされてしまうだろう？」

僕はその返事に納得した。そして、僕はさらに質問した。

「時に逆らうことはできないの？」

名無しはしばらくの間考え込んだ。

「無理だね。ある程度未来を変えることはできるかもしれないけど、それでも最後には年をとって、死んでいくんだ。本やゲームのように年を取らなかったり、死なないなんて現実にはあり得ないことな

んだよ。もつと現実的にならずにちやいけなんだよ。」

「いったい誰が人生や運命を決めているの？」

名無しはまた考え込んだ。

「さあね、本当に神様がいるかはわからないし、仏だって、死んでしまえばそのらの生き物が仏になれるんだ。結局は誰が決めているのか、誰も決めていないのなんて誰にもわからないんだよ。」

僕は自分の胸に手を当てた。心臓の鼓動を感じる。何時か僕も心臓が止まる日が来るのかと思うと、少し死んだらどうなるかを考えてみた。だけど、何も思いつかなかった。死んだらどうなるかなんて、死んでみなきゃ誰にもわからない。そんなこと考えるだけ無駄だ、時間の無駄だ。

「ねえ、僕も何時か、ああなるのかな？」

僕は母さんの棺を見ながら言った。名無しはあっさりと答えた。

「そりゃ君だって生物なんだ。どんなに下等でも、どんなに高等でも、何時か死ぬんだ。自殺なんて考えるなよ。死ぬには勇気がある。それに、君はまだこの世に飽きるほど生きていないだろ？」

僕は黙ってうなずいた。

「死ぬのが怖いかい？」

名無しが僕に訊いた。僕は首を横に振った。

「そうだろうね、君ならそう言うと思ったよ。だけどそう言っている人間に限って死ぬときになると生きようとするんだよ。まあ、それは君が死んだときにわかるだろうけどね。」

話し終わった後、最後に母さんの顔を見た。母さんはまるでただ眠っているだけの様に見えた。僕は母さんの頬にキスをした。いつも母さんは寝る前、僕の頬にキスをしてくれた。でも、僕からするのはこれが始めてで最後だ。棺のふたが閉められた。僕は雨の中、静かに泣いた。この日以来僕は泣いたことがない。

母さんは地中に埋められた。墓石がたてられ、花が添えられた。僕は他に身内がいなかったため、遠く離れた場所にある養護施設に行くことになった。僕はそれでいいと思った。だって、母さんと一緒に住

んでいた家を見ると、また泣いてしまいかもしれないからだ。名無しはもう泣くなと言った。だからもう泣くのはやめようと決めた。それに今までと同じ学校に行くのは気が引ける。

僕は家に戻り、荷物をまとめた。荷物を片づけていくと、昔の思い出の品がたくさん出てきた。母さんの部屋を片づけていると、古いアルバムが出てきた。写真には母さんと父さんと赤ん坊の僕が映っていた。母さんの顔は父さんと別れた後よりも笑っていた。

父さんと母さんは元々大学時代の同級生だった。大学でも有名なカップルで、大恋愛の末の結婚だったらしい。その父さんと母さんが別れたのは父さんが浮気をしていたことがわかったからだ。

「人間なんてこんなものさ。最初は永遠に一緒にいるとか言っているけど、何年か経つと結婚生活に飽きてきて簡単に浮気に走る。君が生まれた頃が一番幸せだった頃だろうね。だけどその幸せも永くは続かない。君が生まれてわずか5年で別れてしまった。結局子供は大人の身勝手によって幸せを示す道具に過ぎなかったんだよ。君もいつか大人になっていくだろうけどあんな大人にはなるなよ。人間は親によって子供が変わる。汚れた政治家の子供は汚れた政治家にしかない。金儲けをする医者の子供はそういう医者にならん。ただ、だけどそうとは限らない場合もある。ちゃんと自分の意志を持った子供だって産まれてくる。君もそういう大人になれよ。」

そのとき、名無しはそう言っていた。

僕はそのアルバムを他のいらぬ物と一緒に庭で燃やした。だけど僕が赤ん坊の頃に撮られた家族の写っている写真を一枚だけ残した。僕は元々過去の事にはこだわらない人間だった。だけど写真一枚ぐらいはいいだろうと思った。昔の写真はそ

ね一枚を残して全て灰となり風に飛ばされていった。

「僕は女々しいかい？」

僕は名無しに訊いた。

「そんなことはない。誰だって昔の事を覚えておきたいって思うこ

とはある。写真を1枚残すも全て燃やすも君の自由なんだ。僕が言う事じゃないよ。君にはこれから新しい人生があるんだ。死んだ母親や離れた父親が何を言おうと君を縛ることはできない。君は自由なんだ。いちいち僕の意見を聞かなくてもいい。確かに僕は君の行動を見て意見を出す。やめておいた方がいい事はやめた方がいいと言う。だけど、それを聞くのも聞かないのも君の自由だ。君が誰を傷つけようが、誰を好きになろうが、そんなこと君が決めることだ。僕の意見はせいぜい参考にしかないんだ。」

名無しはそう言った。僕は荷造りが終わると、自分の部屋のベッドで寝た。部屋はがらんとしていて、僕とベッド以外には何もなかった。僕はここで過ごす最後の夜を1人で過ごした。取り忘れていたカレンダーは今4月だと僕に黙って告げていた。カレンダーには桜の写真がついていた。このカレンダーは植物好きの母さんが買ってきて飾った物だ。僕はこのカレンダーは置いていこうと考えていた。養護施設に行くのにカレンダーはいらないと考えたからだ。もはや僕には時は関係ないのだから。明日には雨はやむだろう、そう思いながら、僕は眠った。耳に聞こえるのは、雨の音だけだった。

第2章

翌朝、僕は迎えにきた車に荷物と一緒に乗り込み、車の窓から家を見上げた。

「少し待って下さい。」

僕は運転手にそう言い、一度車から降りた。そしてもう一度家に入っていった。

僕は壁に手を振れ、この家での思い出を振り返ろうとしたが、全てを思い出すには時間がかかりすぎる。僕は初めてこの家に来たときのことを思い出した。僕の記憶はともまばらだった。なんせ僕がここに来たのは5才の時だ、完璧に覚えているわけがない。僕が覚えているのは、5才のときの僕が母さんに手を引かれ、この家の門を潜ったときだけだ。そのときの母さんの顔はよく覚えていないけど、悲しそうな顔をしていた気がする。

父さんと別れたことで母さんの心には、ぼつかりと穴が空いてしまっていた。僕は母さんの心の穴をふさぐことはできなかった。そして母さんが死んだ今、僕の心の中にも大きな空洞ができてしまった。今まで当たり前のように過ごしてきた日々が、もう二度と来ないと思うと、胸が痛くなった。

僕は家の扉をゆっくり閉めた。鍵は掛けない。もう帰ってこないんだから、鍵を掛ける必要なんてない。僕が家の門を潜ったとき、もうこの家は僕の家ではなくなった。取り外された表札や、誰もいない無人の家が、それを物語っている。僕は車に乗り込み、車の扉を閉めた。僕は振り返らなかった。この家にも、この町にも未練はない。

車が動き出した。僕は心の中で誓った。

【もう誰にも心を開かない。執着しなければ、独りになったとき、何も悲しくない。】

「執着しなければ悲しむことは何もない。君は自分のルールをつく

った。だけどそのルールは確かに悲しみを消せるけど、同時に楽しさも消してしまう。それでも君はその道を選ぶんだね？」

僕は黙ってうなずいた。名無しはまた言った。

「まるで小説やマンガに出てくる悲劇の主人公みたいだけど、現実にもたまにこんなことがある。それがたまたま自分自身になっただけだ。作者はストーリーを考えると、いつも主人公や登場人物に心の傷を付ける。その方がおもしろいからね。お話では、最後には心の傷は癒え、明るい未来を目指すという話が多いけど現実ではそうはいかない。本の中では作者が神となり、キャラクターたちの人生を創り上げる。生も死もすべて神次第だ。だけど現実では誰が決めるわけでもない。自分自身が決めなければならない。神様がいるかどうかは誰にもわからない。信じるも信じないも君の自山だ。どっちにしろ君はこれからは誰にも頼ることはできない。本当に信じられるのは自分自身だ。自分1人で生きていかなければならない。それが君のつくったルールの最低条件だ。」話し終わると名無しは黙り込み、僕の隣で眠った。僕も背もたれにもたれ、小刻みに揺れる車の中で静かに眠った。誰も僕を起こそうとする者はいなかった。

工場が鳴らすお昼のサイレンの音で僕は起きた。僕は窓を開け、窓から顔を出した。僕の眼に映る景色は僕がいた街とは全く違う、僕が見たことのない景色だった。車はある建物の前で止まった。

「着きましたよ。」

運転手はそう言ってハンドルから手を下ろした。僕は手荷物を持って車から降りた。建物自体は結構新しく、築10年ほどしかたっていないように見えた。車には運転手が残り、助手席に乗っていたもう1人が荷物を持ち、先に建物の中に入っていた。無愛想だなと思いながら、僕はその後についていった。僕たちは院長室に案内されていった。院長室にいた院長は中年の女性だった。50歳前後の優しそうな女性だった。一緒に来た人は荷物を置いて、さっさと

部屋から出ていってしまった。僕は二度と会うことは無いだろうと思いつながら窓から車が出るのを見ていた。しかし、そんなことはもうどうでもいいことだった。院長は優しく微笑みながら僕に話しかけてきた。

「いらつしやい、私がこの施設の院長です。」

僕は軽くお辞儀をした。

「お母さんが亡くなられてここに来たと聞いています。この施設にはあなたのように身よりのない子供達が20人ほど住んでいます。学校も、近くの学校に転入手続きをしておきました。学校は明後日から行くことになります。困ったことやわからないことがあれば気軽に聞いてください。」

院長は話し終わると部屋にあった内線で誰かを呼んだ。しばらくすると、僕と同じぐらいの男の子が入ってきた。

「あなたと同室になる桂木翔君です。詳しいことは彼に聞いてください。」

その子は僕の前に手を差し出した。

「桂木翔です。よろしく。」

僕は少しとまどいながら彼の手を握った。僕らは院長室を出て、僕らの部屋へ行った。部屋は前の僕の部屋より一回り大きめの部屋だった。二段ベッドが置いてあり、机が2つ並んでいた。他には洋服棚と小さい本棚が1つずつ置いてある以外、何もなかった。ただ、上のベッドの方の壁にはポスターや写真が貼られていた。

「服は棚の方に掛けておいてね。あとベッドは下の、机は右のを使つてね。」彼はにこにこしながら言った。はつきり言つて、僕はこういうのは苦手だ。彼は自分のベッドに上がり、写真を取って僕の所へ戻ってきた。

「あらためて、桂木翔です。翔って呼んでね。あと、これが僕の両親。」

そう言いながら取ってきた写真を僕に見せた。写真には3人で仲良く写っている親子が写っていた。僕は手帳に入れていた写真を取

り出して翔に見せた。翔はその写真を手にとって、まじまじと見ていた。自分の赤ん坊の頃の写真を他人に見せるのは少し恥ずかしい気もしたが、実際に家に残っていた家族3人が写っていた写真はこれしかなかった。僕が赤ん坊の頃の写真は、両親が離婚したときほどんど処分してしまったからだ。母さんは、昔の思い出を残しておきたくなかったのだ。それでもこの写真だけが残っていたのは、おそらく初めて家族3人で旅行に行ったときの写真だからだろう。

でも、旅行に行ったのは僕が4歳の時までで、その頃から両親は毎日喧嘩をしていた。新しい家に着いたとき、母さんはアルバムのほとんどを燃やしてしまった。僕はそのとき、陰から母さんが写真を燃やすのずっと見ていた。母さんは泣いていた。僕には母さんがなぜ泣いていたのかわからなかった。そして、今もわからないままだ。

翔はしばらく見ると、写真を僕に返した。僕はその写真を、持ってきた写真立てに入れて、自分の机の隅に置いた。そのとき、雨が降る音がした。翔は窓の方に行き、窓を開けた。かなりきつく降っていた。元々朝から曇っていたのだから、別に降ったっておかしくない。この雨はいつまで降るだろうか。明日か、明後日か。だけど、もう僕にはそんなことは関係ない。

僕は名無しに話しかけた。だけど名無しは何も答えない。疲れているのかもしれない。僕は沈黙の中、そこに意味もなく、何も考えずに立っていた。雨は沈黙の中、降り続けていた。

第3章

翌日、まだ雨が降っていた。僕は母さんの葬式を思い出した。あの日も、雨は降っていた。雨は何のために降るのだろう。そう思いながら、僕は傘も持たずに外に出た。雨はまるでシャワーの様だった。

「君は昔から雨に打たれるのが好きだったね。今まで強く心に残っている記憶の背景には、いつも雨があった。両親と最後に行った旅行の帰り、両親が正式に離婚した日、母親が死んだとき、母親の葬儀。すべて雨が降っていた。君の人生は雨と共にあるんだ。」

そう名無しは言った。名無しはもう元気そうだった。

「僕にとつて雨とは何なのだろう。」

僕は名無しに訊いた。

「君にとつて雨はすべてでもあるかもしれないし、何でもないのかもしれない。そう深く考えることではないのさ。君はもう何も執着するものがないんだろ？君は他人にも、自分自身にも興味がないんだ。そんなこと考えるだけ無駄さ。」確かに名無しの言うとおりだ。僕には何も関係ないんだ。誓ったんだ。1人で生きていくことを。僕がそんなことを考えていると、誰かが僕の肩に手を掛けた。

「何やってるんだ？風邪ひくぞ。」

後ろを見ると、傘を持った翔が立っていた。翔は僕の手を引つ張り、玄関の方へ入っていった。僕は黙って彼について行った。彼は部屋に入ると、棚からタオルを取り出し、僕に渡した。

「あんなところで何をしていたんだ？」翔が訊いてきた。「別に……。ただ雨に打たれるのが好きなんだよ。」

「ふん……。変わってるな。別にいいけど明日は学校なんだから風邪をひかないようにな。」

翔はそう言うと、部屋の外へ出た。

翔は僕の行為を「変わっている」と言った。だけど、「変わって

いる」とはどういうことなのだろうか？この世界でその行為を行っている人が少ないからだろうか。昔は「変わっている」といわれたものが、何年かしてそれが当たり前のことになっていたりする。この世界に「変わっている」というものはあるのだろうか？

「【変わっている】というのはその人が普通ではやらないことだからだ。だけどその人にとってはそれが普通なんだ。たとえば今は【変わっている】といわれるかもしれないけど、そのうちそれが普通になったりするんだ。【変わっている】なんてたいしたことじゃないんだよ。」

名無しはそう言った。

翔が部屋に戻ってきた。翔は新品の教科書やノートを僕に渡した。「それが新しい教科書だ。僕と同じ学校に行くことになったから一緒に行こう。」

僕は黙ってうなずいた。僕は翔に言われて時間割をし、教科書やノート1つずつに名前を書いた。名前が書かれた物から僕の物になっていく。

そこでふと考えた。僕はあまり自分の名前を大事にしているわけではない。だけど、僕の名前を考えて僕につけたのは僕の両親だ。なら僕は両親の物だ。しかし母さんは死んで、父さんはもう僕の父親ではない。じゃあ、僕は一体誰の物なんだろうか？

「君に名前を付けた人はもうここにはいない。だから君はもう自由なんだ。誰も君を名前で縛ったりしない。僕には名前がない。僕を縛る名前は最初から無い。君も今同じ事になっているんだよ。」

名無しはそう言った。

僕は名前を書き終えると、明日学校に持っていく分を鞆に入れ、残りの教科書やノートを本棚に並べた。僕はこの部屋をいつまで使うだろうか。大人になるまで？それとも死ぬまで？僕は自分は長生きしない気がしていた。

翌日、僕は翔に起こされ朝食を食べた後、学校へ向かった。初め

て通る道、初めて見る風景。ほとんどが僕の住んでいた街とは違っていた。同じなのはそこら辺にあるや電柱や、何処にでもありそうな公園などの公共施設くらいだった。

「何をしてるんだ？ 学校に遅れるぞ。」

翔が言った。僕は翔の後について行った。

新しい学校は、昭和の前半に造られたかなり古い学校だった。木造力で、廊下を歩くたびにみしみしと音をたてた。翔の話だと、もう来年には閉校するらしい。いかにも幽霊が出そうな学校だった。僕は翔と同じクラスになった。僕のクラスの人数はたったの3人。僕が前に通っていた学校とは全く違っていた。ただ少人数だからなのか、同級生や先生達は優しくしてくれた。だけどそれでも僕は自分からみんなに声をかけたり、遊んだりすることはなかった。僕に友達はいらないのだ。

母さんが死んでから1ヶ月ほど経ったある日、学校帰りに翔が僕に訊いてきた。

「どうして君はいつもみんなと積極的に接したりしないの？」

「する必要がないからさ。僕は誰も必要としない、そして誰も僕を必要としない。ただそれだけのことだよ。」

僕はそう言った。

「いつかみんな何らかの形で別れるんだ。別れたとき悲しいのはごめんだろ？ だから最初から悲しまないように、深く関わらなければいいんだ。簡単なことだろう？」

僕がそう言うのと翔は一瞬表情を変え、黙って走り去ってしまった。僕が部屋に戻っても翔は何も言わなかった。食事の時も、洗濯の時も、寝るときも、翔は何も言わなかった。翔がなぜ怒っているのかわからなかった。ただわかるのは、僕と彼では世界の価値が違うということだ。いや、正確には「生」の価値だ。僕に翔の気持ちがわからないように、彼には僕の生き方が理解できないのだろう。僕だってこんな生き方が幸せだとは思えない。しかしたとえ幸せになる方法があり、それを知っていたとしても、僕はその道を選びはし

ない。僕は幸せを望んでいるのではない。おそらく、何も望んでいないのだろう。僕は間違っているのだろうか？ 名無しに訊こうかとも思った。しかし訊かなかった。僕は正解が欲しいのでも、正しい解答が欲しいわけでもない。そして自分で気づいている。その問いに答えられる完全な解答は存在しないのだということを・・・。

その夜、雨が降ってきた。雨は等しく降り注ぐ。窓に、屋根に、そして人にも雨は降り注ぐ。僕は雨の立日を聞きながら眠った。雨の音以外は何も聞こえなかった。夢の中で回る。僕の狭くて暗い世界が。僕はその意味を知らない。

終章

朝、雨はやんでいた。僕は翔のベットを覗いたが、翔はいなかった。ずいぶん嫌われたものだと思いつながら、僕は着替えをして朝食を食べに行つた。朝食を食べながら僕は考えてみた。翔とずっと話していないが、名無しとも話していない。話し相手に困っていた訳でもなかったのだ、ずっと声をかけていなかったのだ。

「君は最近自分から話しかけたりしないんだね。」

僕は名無しに言つた。

「必要がないからさ。君だって必要がなければ僕に話しかけたりしないだろ？」 名無しはそう言つた。僕にはやけに不機嫌に聞こえた。

「君は僕がしばらく話しかけなかったことに怒っているのか？」

「別に怒ってないよ。」

名無しはそう言うのと黙り込んでしまった。名無しとは長いつきあいだが、名無しの考えていることは僕にもよくわからなかった。

僕は朝食を食べ終わると部屋に戻つた。翔は帰つてはいなかった。僕はジャケットを着て外に出た。久しぶりに太陽を見た。けど山の方から雲が来ていた。また雨が降るだろう。僕はそう思いながら買い物に出かけた。

店を出たとき、遠くで雷の音が聞こえた。やはりもうすぐ雨が降るんだ。

「どうして雨が降ることがわかっていたのに傘を持ってこなかったんだい？」 名無しが聞いてきた。

言われてみれば、なぜ傘を持ってこなかったんだろ？ なぜか必要がない気がしたんだ。

「わからない。降る前に帰るつもりだったのかもしれない。」

僕は名無しにそう言つた。僕は買い物をあきらめて帰ることにし

た。名無しは僕の後ろにいた。考えてみれば、名無しと2人だけというのは久しぶりだった。

僕は歩きながらなぜ名無しが不機嫌なのかを考えてみた。僕がしばらく話しかけなかったからだろうか。いや、名無しは基本的には嘘をつかない。別に怒ってはいないようだ。しかし、不機嫌なことには変わらない。ではなぜだろうか。直接聞いても名無しは答えはくれないだろう。僕はあきらめて違うことを考えることにした。僕は翔のことを考えてみることにした。翔は完全に怒っているのだろう。何で怒っているのだろう。僕がみんなを信頼してないからだろうか。だけど僕は本当のことを言っただけだ。別に好かれようとしていたわけでもないの、どうでもいいや。

「ねえ、君はどう思う？」

僕は後ろを振り返って名無しに訊いた。だけど名無しはそこにはいなかった。名無しはいつも僕のそばにいた。今まで離れたことはなかった。その時、雨が降ってきた。僕は名無しが母さんの葬式の時に言ったことを思い出した。

「そうか、君は……。」

君は最後まで一緒にいてはくれないんだね。

その瞬間、僕は何もわからなくなった。ただ、自分の体が浮いていることだけはわかった。僕は地面にたたきつけられた。近くにはトラック、そして血塗れの自分。

どこから来たのか、翔が僕のそばまで走ってきた。だけど、僕は何もしゃべれなかった。翔が何を言っているのかもわからなかった。目がだんだんかすんできた。これが死なのか。僕はそう思った。僕は心の底では自分が今日死ぬことがわかっていたのかもしれない。だから傘を持たずに出かけたのかもしれない。名無しが不機嫌だっ

たのはこのことがわかっていたからかもしれない。

「だけど、もうそんなことどうでも良くなってきた。翔は泣いていた。だけどそれが涙なのか、雨なのかわからなかった。不思議に死ぬのは怖くなかった。何も見えない、何も感じない世界で、僕が聞いたのは雨の音だけだった。まるで音楽のようだった。雨が旋律を奏でている。」

「本当に君は最後にならないと何もわからないんだね。」

僕は少し驚いた。眼は見えないけど確かに名無しがいることがわかる、名無しが見える。

「もう会えないのかと思ったよ。」

僕はしゃべれないはずなのにしゃべった。

「会わないつもりだったけど。だけど最後に会いたくなつたんだ。これでお別れだ。君は死ぬ。そしてもう二度と会うことはないだろう。」

「やっぱり、僕はもう終わるんだね。」

僕は言った。

「そうだよ。死ぬのは怖くなさそうだね。君は自分の命さえ関心がないんだね。別にそれはそれでいいさ。もし次にどこかで逢えたら死んだら何処へ行くかを教えてくれ。」

「うん、だけど逢えるかな？」

「さあね、だけど僕はもう一度君に会いたいと思ってるよ。」

「僕もだよ。」

名無しは立ち上がり、少し進んでから振り返った。

「これで最後かもしれないな。一応言っておくよ、さよなら」

「ああ、さよなら。」

名無しはそのまま闇の中に消えていった。僕はもう一度彼に会えるだろうか。逢えるならば、僕は別の形で会うことを望むだろうか。それともまた同じように、常に寄り添う存在でいてほしいと願うのだろうか。

雨が僕の血を洗い流す。雨音は僕を眠りへ誘う子守歌の旋律となる。

終章（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。数年前に書いたものですが、文学として初めてまともに書いたものです。おかしなところや、誰かの作品に似ていると思われるかもしれませんが、その辺りは多少眼をおつぶりになられるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9623c/>

雨の旋律

2010年10月8日15時16分発行